

山口県師範学校

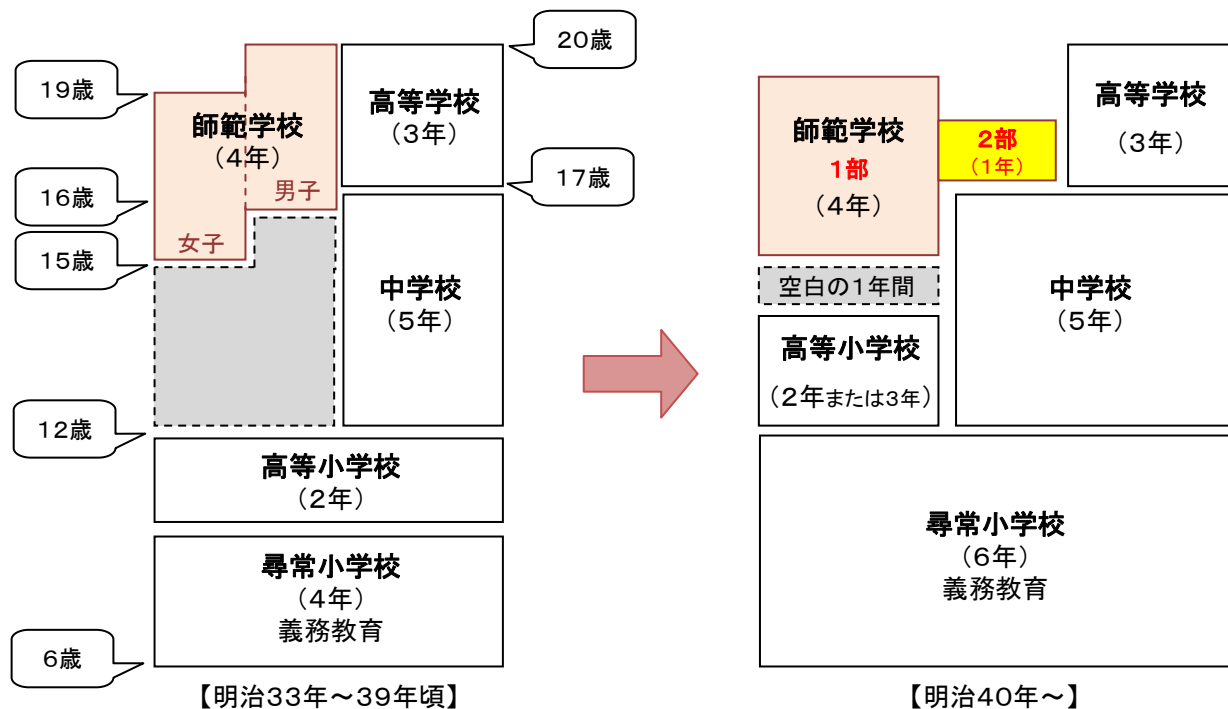
山口県教員養成所から出発した師範教育は、着実に発展を続け、多くの教員を輩出してきた。師範学校は授業料が無償であることに加えて学費までもが支給されたため、家庭の経済的事情から中等教育機関への進学を断念しなければならなかった者にも、その門戸を開いていた。

明治30(1897)年に公布された「師範教育令」により、翌年、県は山口県尋常師範学校を山口県師範学校と改称した。また、明治40(1907)年に制定された「師範学校規程」により、山口県師範学校は本科を1部と2部に分け、修業年限を1部は4年、2部は1年とした。

「師範学校規程」以前は、尋常小学校、高等小学校を卒業し、師範学校へ入学するルートが主であったが、2部ができたことにより、中学校を卒業し、師範学校へ入学するという別のルートが整備された。2部の卒業生には、1部生と同等の教員資格が付与され、教員の質的向上が期待された。



山口県師範学校正門



「師範学校規程」による進学体系の変化

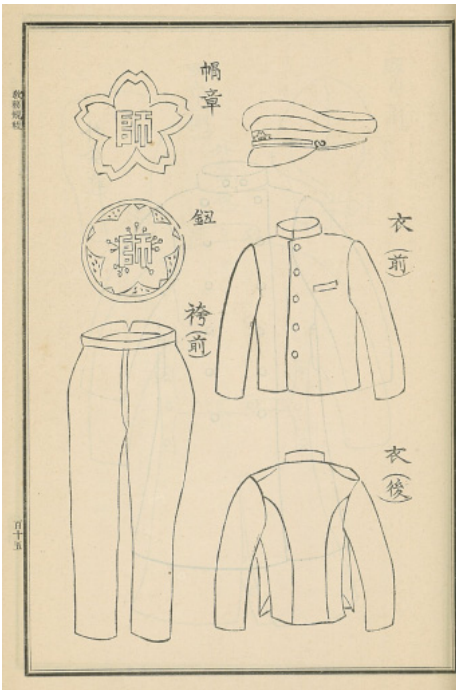
山口県室積師範学校の開設 一二師範時代の開幕一

明治40(1907)年の「小学校令」改正により、小学校正教員の確保が緊急の課題となった。山口県においても第二師範学校設置の必要性が次第に高まり、県はその対策として、大正3(1914)年、県立工業学校を第二師範学校に転用することとした。

室積の県立工業学校は、工業従事者の育成を目的に明治36年に開校したが、県内での卒業生の需要が意外に乏しく、他県へ就職する者が多かったため、廃校とすることが決まった。



山口県室積師範学校正門



室積師範学校の制服
(『室積師範学校一覧』より)

第二師範学校の設置理由を当時の馬淵知事は県会で次のように説明している。「教員不足のため三割近くを検定教員(※)に頼っているのが現状である。その検定教員は師範学校卒業生に比べ多くは劣るが、不足の事態を考えると少々力量不足でも採用しなければならない状況にある。一学級一人の正教員を確保せねばならぬ。」

大正3年4月1日、山口県室積師範学校が開設された。これにともない山口の本校は山口県山口師範学校と改称され、2つの師範学校の並立時代を迎えることとなった。

大正14年4月、「師範学校規程中改正」により、師範学校に画期的な改革が起こった。それまで、師範学校は入学年齢を15歳と定めていたため、中学校にも小学校にも接続しない、いわば進学体系から孤立した状態であった(左頁の図参照)。しかし、この改正により、満14歳から入学が可能となり、高等小学校からの進学がスムーズになった。また同時に、専攻科も新設され、教科研究の領域に特色を持った優良な教員の養成が可能となり、教育水準を高める上で重要な契機となった。

※検定教員とは・・・

教員免許状を有しない者で、都道府県が行う検定試験によってその資格を得た教員のこと。明治13年から実施された「小学校教員免許状授与試験法」がはじまりで、様々な事情で師範学校等に進学できなかった者でも独学、独力によって資格が取れたため、教員の充足にもつながった。

山口県女子師範学校の開設 —女子教員の充足—

明治33年(1900)年時点で、小学校の有資格教員は男子 1,403名、女子89名と女子教員は全体の約6%程度に過ぎず、しかも半数近くが専科(家事裁縫)教員であった。

県は、女子正教員の充足を図るために、大正8(1919)年4月、山口師範学校に本科女子2部を併設した。この女子2部は、開設年より志願者が募集定員の2倍に達するほどであった。この状況

を受け、翌年には室積に山口県女子師範学校が設置された。これにともない、室積師範学校は廃止され、室積師範の男子は再度改称された山口県師範学校に、山口師範女子部の学生は室積の女子師範学校に移動となった。



山口県女子師範学校全景(大正9年頃)



工芸の授業風景

他府県の多くは、女子教員の養成のため明治年間には女子師範学校を設置し、その需要に応じていた。本県でも遅れ馳せながら男女両師範学校を備えるという典型的な教員養成制度が確立したのである。このことは山口県近代教育史上、重要な出来事であった。両師範学校は、昭和18(1943)年に官立山口師範学校として再び統合されるまでの24年間、独立した別個の学校としてその歴史を刻むことになった。



東京への修学旅行(二重橋の前にて)

官立への昇格

師範学校を中等教育として留めておくことは、教員養成の重要性からみても、生徒の学歴、年齢からみても不自然であり、その改善は早くから叫ばれていた。教育振興の要諦は教師の資質にあるとして師範学校の昇格が図られ、昭和18(1943)年3月、「師範教育令」の改正により中等学校に接続する高等専門学校への昇格が実現した。

同年4月、山口県師範学校と山口県女子師範学校が統合されて官立山口師範学校に昇格。従来の1部・2部制を廃止し、本科を修業年限3年の高等専門学校に改めると同時に、修業年限2年の予科を設置した。本科の入学資格を、予科、中学校、高等女学校の卒修業者とし、男女で別個の学校であったものを一師範学校に統合して、それぞれ男子部・女子部とした。施設は、男子部は山口県師範学校、女子部は山口県女子師範学校のものを用いた。初代校長には三田主市が就任した。

この大改革は期待甚大であったが、成果を上げることなく次第に形骸化していくこととなった。しかしながら、この官立への昇格が後の山口大学教育学部へとつながっていくのである。



三田主市校長

天皇行幸 —3つの碑—

師範学校は、明治18年7月に明治天皇、明治41年4月に大正天皇(当時は東宮)、大正15年5月に昭和天皇(当時は皇太子)と、3度の来校という名誉を受けている。それぞれの行幸の際に記念碑が建設され、今もその歴史を刻んでいる。



光被(伊藤博文書)
附属山口小学校正門



時擁(山縣有朋書)
附属山口中学校正門



俊徳(野村素介書)
教育学部前庭